藝州 嚴島圖會

二

嚴島圖會巻之二

目録

櫻町中納言成範卿書

廢愛染院　神力寺　大御堂　廢龍翔寺趾

新町摺鉢谷　存光寺　濱役所　町會所

枌場　宮尾城墟　今伊勢神社　休堂

二王門　小浦　池浦　蛭子社

角佛堂　揺岩　西行返

本地堂　本社の後　本尊十一面観音

毎年正月八日より一夏九旬の間樒供養并法會ありこれに依て夏堂とも称す正月元日供僧の脩正會ならびに正月五月十月の十八日観音講十一月廿四日には天台大師講等あり

御笠濱　鳥井の御前ともいふまた本社のあたりをなべていふともいへり

御笠濱暮雪　八景の一

浦なみのいろもひとつにふりつもる雪かみかさの濱のまはでぢ　従二位実岑

あらはとや神もみかさの濱松にたなはのときくつもる白雪　宜阿

白雪重々御笠濱。平沙十里更清新。夜来
最覺好風色。寒月和光同玉塵。　菅原在廉

風捲飛花推笠濱。漁夫轉棹却迷津。雲林
煙塢渾一色。更訝波神撒玉塵。　黄檗　百泉

本地堂(ほんちだう)
寶庫(ほうこ)
御霊川
御供所
本地堂
宝庫
預坊
筋違橋
神庫

御笠濱暮雪

平安 孝文

鏡池秋円
大内義隆
神姫殿上月輪低
百八廻廊路欲迷
吟翁不怯歸殊飽
前導何時無鹿蹄
頼杏坪
平安孝敬

玉御池 すべて大鳥居より神殿のほとり迄いふ 玉ハ讃美の詞なりとぞ

鏡池 客神社の邊にあり潮退て後くぼき處ありて別に一小池をなすが如し秋夜一輪の月光を浮ましむ

鏡池秋月 八景の一

空こほる月もかくれ池の名を見せてや秋のかげみがくらん　羽林雅季

みやしろにうつる光も隈なきかゞみの池に沈める月影　宣阿

海門霊跡甲西洲
嚴島佳名千古悠
多少行人冨観賞
瑶池明月鏡池秋　三位藤原宣通

一泓寒碧傍霊祠
浄似菱花可鑑眉
最是清秋明月夜
其如漢帝影娥池　僧獨麟

清秋月満鏡容池
古殿深沉夜色奇
假使蟾宮藏蹟去
分明照見玉娥姿　僧瞻雲

海水通池鏡面開
秋光一碧絶煙埃
最憐静夜姮娥月
臨照盈々移影来　山本元貞

朝座屋清水 客神社の後瑞籬の内にあり朝座屋に用ふる所にして猥に汲むことをゆるさず朝座屋ハ神人雑掌の所なりこの水清冷にして曽て難治の病を癒しむといふ依てまさく汲りの水ともいふ

卒堵婆跡 大宮鐘樓の傍にあり平判官康頼鬼界島よりながせし卒堵婆流寄しところなり今石の燈籠一匾を建てその標とせり當につけて見るべし或云この石燈籠ハ康頼帰京の後寄附せしとて云なりともいへり

○源平盛衰記に曰康頼入道ハ都のこひしさもさる事にて特に七十有余の母紫野といふ所に在るを思ひ出ていとゞせん方なくおもひける流されしときかくと知せまほしかりけれとも聞たまひなば悶焦給はんことも痛ましく思しけれはかくともいはずして下りたまへば存命て今迄もおはせぞこの形状をつたへ聞ていつぞかりつは歎きたまはんなどいひつゞけてたゞ泣より外のこともなし悲しさのあまりにかくぞおもひつゞける

さつまがた沖の小島にわれありと親には告よ八重のしほ風

おもひやれしばしと思ふ旅だにもなほ故郷はこひしき物を

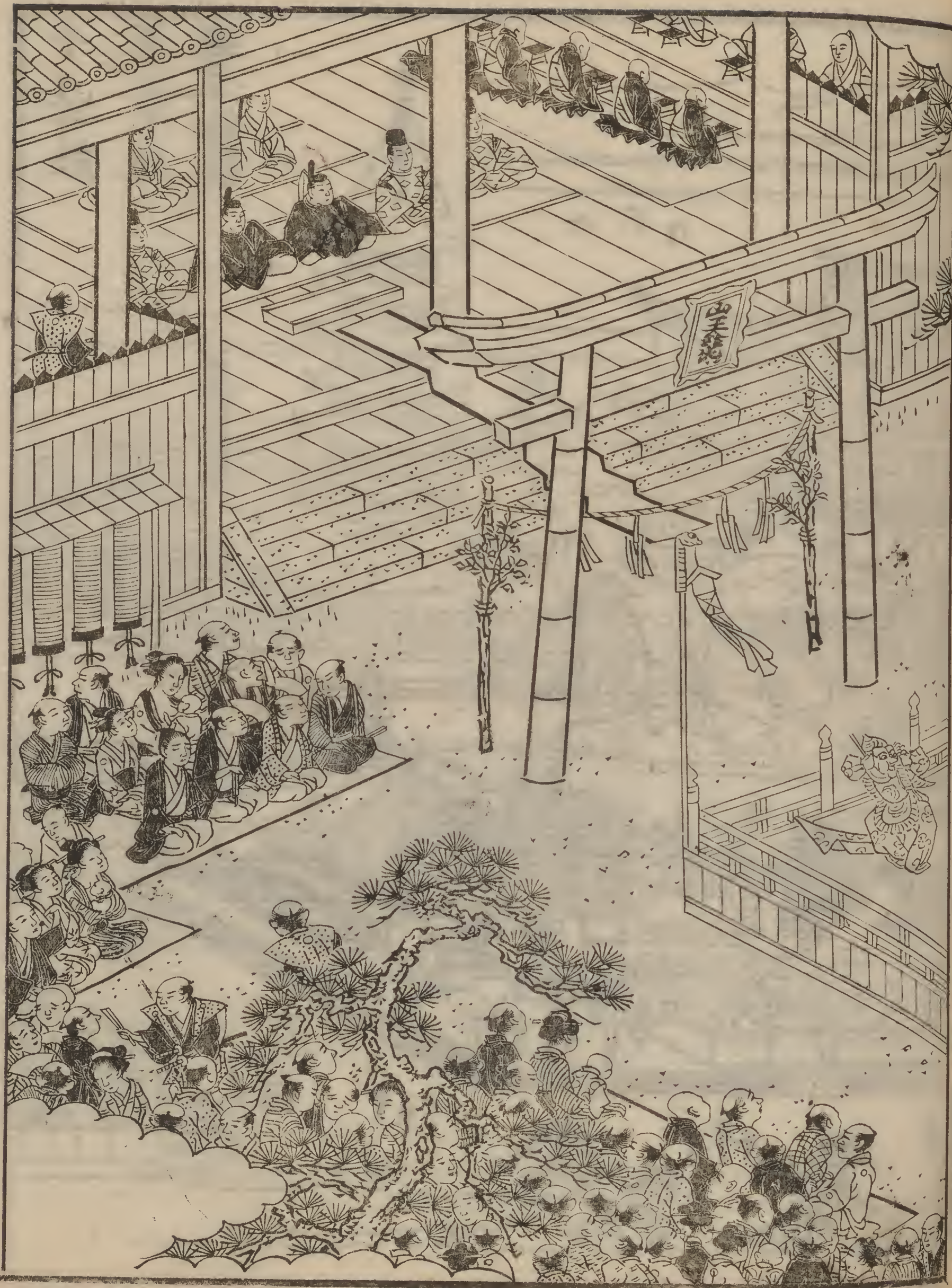
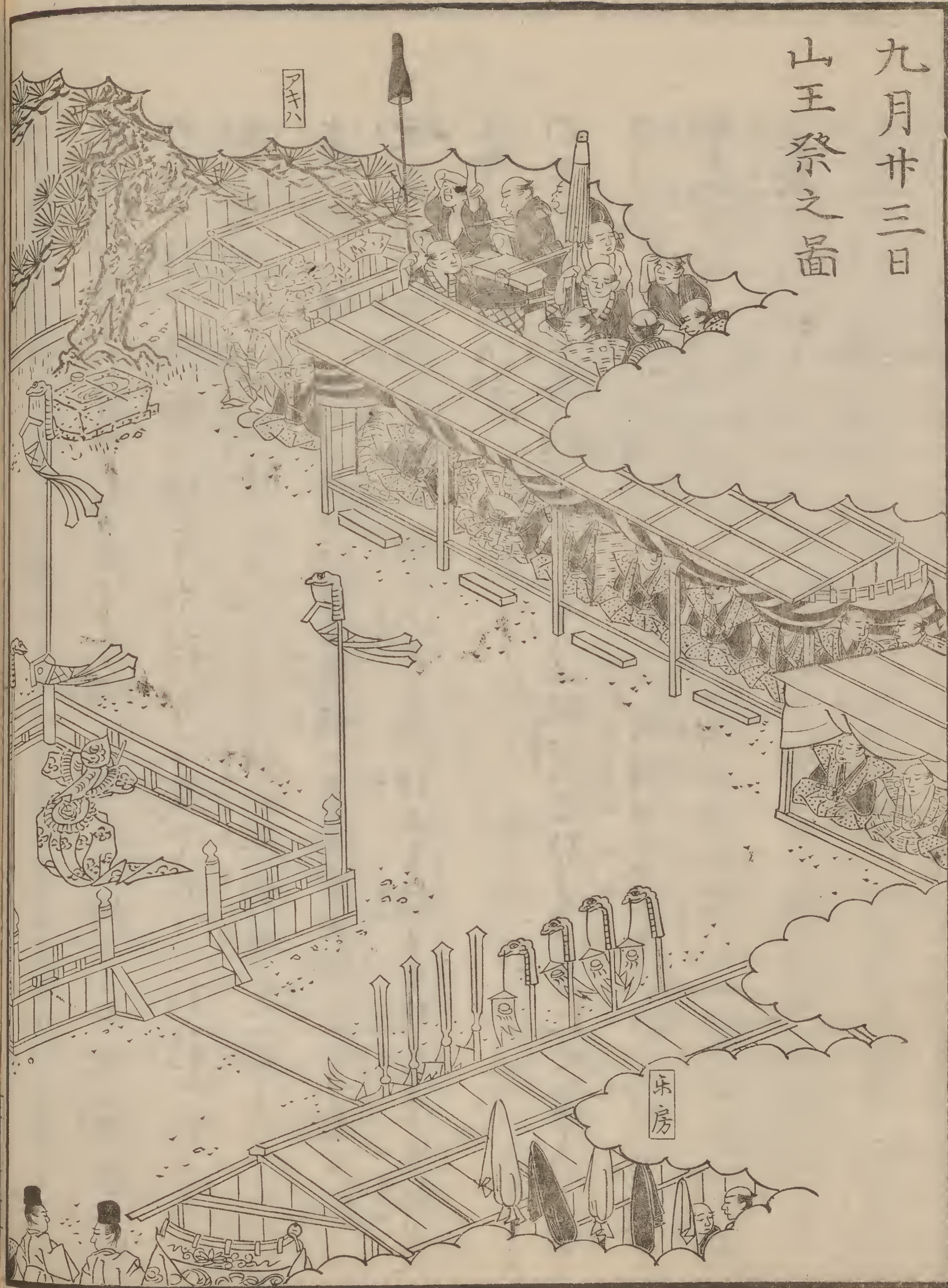
千本の率堵婆をつくり頭には阿字の梵字を書これもてまハ二首の哥を染め下に康頼法師とかきて文字を彫て誓ひけるハ帰命頂礼熊野三所権現若王子分てハ日吉山王王子眷族惣じて上ハ梵天帝釈下ハ堅牢地祇ことにハ内海外海の龍神八部憐を垂れたまひて我かき流す言の葉をたのみに風の便波の傳に日本の地につけたまひ故郷にこれを送る母に見せしめたまへといのりつゝ西の風の吹と見ては八重の波にぞ浮めける行に百行あり國土を治むる謀も善に萬善あり生死を出る勤なり率堵婆ハ萬善の随一諸佛これを歓喜し孝養ハ百行の最長龍天これを哀愍し漂々たる海上汐路をはるかの波のうへにうかめ次とはれもは称どせめては母のうなしはにかくしてこそは祈られ思ふこともひと風とたり願ふねがひも叶へて龍神納受ありましたまひ彩宮の濱に率堵婆一本寄たるを浦人これを見つけて熊野の御前に奉りつゝしとも世の思きたるにや披露ハなし安藝の嚴島にも一本着たりける折節康頼入道に縁ある僧判官西海の波にながされし行方を何となく都をはなれ出て西國の方へ修行しけるが便船あらば此のしまへもわたらばやとおもひしまでも毎日思ひけるまでは船も人もかよはざれのづから商人などの渡るも僅に日和を待得てこそ行なとかるまじいかにも尋行べきこそちもせんと有けれども漸く安藝國までは下りにけり嚴島明神に參詣して兩三日ぞ有ける抑當社乃景氣を拝されば後ハ翠嶺山高くして吹風効験の高きことを示し前には巨海水深うして波瀾弘誓の深きことを表す潮水社廊を浸さんと見へ紺瑠璃を瑞

この所に康頼
のとうろうあり
康頼卒堵
婆の圖
卒堵婆れ流れより
しところハ本文に載たる平家物語に
嚴島大明神の御前のなぎさと見えた
るおよそハこれあたりなるべし石燈籠一
基その跡の標と建たりその燈籠の圖ハ下
に載たるを見るべし
鐘樓にハ大内義隆
の寄附の鐘をかけたり
その銘下に載たりかく
きハ卒堵婆の流れしよ
りし世にハこの鐘樓ハ
あらざりしなるべけれど其所
をちなみに知らしめん
がために圖しつ
そとば石

雞ニ數ふと疑ふる引汐神前を去ると絶ハ合浦の玉を庭上ニ蒔ろとはなしまする和光同塵の利益ハ何れもとうくありといへども海畔の鱗ニ契を結びたまふ因縁誠ニ知がたし参詣合掌の我までも八相成道の結縁ハたのもしくこそおもハるれ此明神をバ平相国深く崇敬したまふゆゑぞかしと思ひいづるも恐ろし幣とりてへ努るかなきバ只法施をぞ奉りける心中ニ祈念するハ帰命頂礼和光垂跡の當社明神硫黄島の流人康頼が生死知らぬかへなれも存命あらバ夜の守晝の守となり給て波の便を聞し来再び故郷の都ニかへしたまへと祈るこそ哀なれ終日念誦したりける晩にどに神人神子御前の渚ニ遊ぶも月の出汐の満くるにまたはうとなく波ニ流るゝ藻屑の中ニ卒堵婆は一本見え来る怪しやいかになるゆかとて取上見れバ二首の哥をかき其下ニ康頼法師とぞ

平判官康頼寄附燈籠の圖

書付たる各々にてこれを取渡し哥を論じ哀なる事なり作者何
人やらんといひたる中に社僧のありけるがいと知りし貌すなれこれはひ
とせ都より薩摩潟硫黄が島へ三人の流人ありし法勝寺の執
行俊寛丹波少将成経平判官康頼なりこの康頼法師が故郷も
こひしく恩愛の親も悲しくてかく書てながせるにこそかゝる様は
むかしもありとこそ聞け是ほど情なく捨てやらるべき都の妻子も
はこそこひしかるなれそれもふて行末きかまほしかるら来これは如何
しても故郷へとゞくべきよすがいひあはせるゆゑか社僧もそのこゝろも汲
え涙もこぼしてうれしくかなしうける中にも是は明神の御計
ひやと尊く貴くぞ思ひける社僧この僧をかへりみければやゝ修行
者の御坊もし都へ上り給はゞこれ卒都婆のこと申はん慥に
平判官康頼が妻子のもとへ傳へたまひなんやといへば僧こゝへてい
なく此事うけたまはるに世にも哀なる事にこそ修行者のたよ
ひ宿はさだまらぬ事なれどももと都の者にて侍りしが折節都へ帰
りのぼり侍り康頼がゆかりを尋ねてはつたへしものに傳へまゐらすべし
且は明神も御照覧あるべしとて件の卒都婆を請とりて禮し
肩に挾み泣く都へのぼりにけり康頼は卒都婆に謌をかき名を記し
文字ほど彫刻みそれに墨を入たれば汐にも波にも消えずして鮮かに
こそ見えたりけれ

○平家物語曰康頼入道はあまりに故郷のこひしきまゝにせめてのはかり
ことにや千本の卒都婆をつくり年号月日家名實名二首の哥をぞ
かきつけける中略是を浦にもて出て南無帰命頂礼梵天帝釈四大天
王堅牢地神王城の鎮守諸大明神別しては熊野權現安藝のいつ
くしまの大明神せめては一本なりとも都へつたへてたべとて[illegible]

九月廿三日
山王祭之圖
アキハ
乐房

千疊敷
五層塔
轉法輪藏
大經堂
龍宮界藏
文庫
金剛院

午王社
經納社
輪蔵
湯立殿

是ハ近年天台僧寂成高麗蔵の破壊せるをいとひて都建仁寺ニおいて其を補ひたる時白雀来り巣ふの禎祥あり今ハその趣を画せるなり

嚴島輪藏經有闕寂成法師
入京勉補其闕云有白爵之
祥見索予詩賦此塞責

曾觀嚴島貝葉闕魚蠹殘壞頗狼藉
就裡可惜高麗版散佚不存六百策
司書神鬼何其惰愛字佛陀亦盡惜
一朝補足是誰力仙靈呈祥生白爵
鄭巣亦豈不思功為裁一篇送省空
佗日相携遊嚴島玉篋生輝舊輪藏

唐僧省空補壞經事
見鄭巣送省空詩

賴杏坪

らなみのよせてハかへる度毎に卒堵婆が海へぞうかべけるそとはた
つかり出次は随ひて海にいきられど目なつもなけど卒塔婆のうかぶ次も一
もりかゝり其の物思ふぞや便の風ともなりたりけんまさ神明佛陀
をやおろせたまひたりけん千本の中に一本安藝のくにいつくしま
乃大明神の御前の渚にうちあげられたりけるに康頼入道が縁ある
りける僧のもし然るべき便もあらばかの孤島へわたりてそのゆくへをも
たづねんとて西国修行に出たりけるがまづ厳島へぞまゐりける中界
此僧いよく尊く思ひ静かに法施まゐらせて居たりけるがやうやく
日くれ月出しいでゝ汐のみち来るに沖よりそこはかとなくゆられより
くる藻屑どもの中に卒堵婆のかたちの見えけるを何となうこれを
取て見けるに薩摩がた沖のこじまにわれありとかきながせる言の葉
なりもじをゑりいれけりけるまだ刻みつけたりけるまで波にもあらはされず

としてうきつ見しゝたりけれ 下略

御手洗川

本地堂の前にありて源ハ紅葉谷なり一ハ御霊川といふ西行撰集抄ニ東の乃に清きながれありみたらひといふとあるハこれなるべし昔ハ此水を神供に用ひしかど今ハ人家水に掩ふて建ならべたまへバ穢をいとふて用ひずとぞ

てにむすぶたらし川の月かげににごらんのちもおもふぞ　似雲

花園

御手洗の流に傍ふて西廻廊の邊までをいふ花の木おほし

菊櫻

同所反橋の傍にあり是もえぎ色なり余の花よりの散てのちおそし咲て花をひらく

寳庫

御手洗川の邊にあり本殿の神庫にして古代より奉納せし所の霊物を藏めたりなり蒔絵兜鎧刀鎗書畫金玉仏像経巻楽器の類ひ庫中に充物して一筆に挙げつくしがたし別に宝物圖會に詳悉せり其庫のつくりざま本をくみあげて壁として土を用ひずいはゆる又倉とよべるこれなり古社古寺にハまれなり

鐘樓

同所の山上にあり社役相圖の鐘なりまくしまゝ中ハ報更に用ふ

山王社

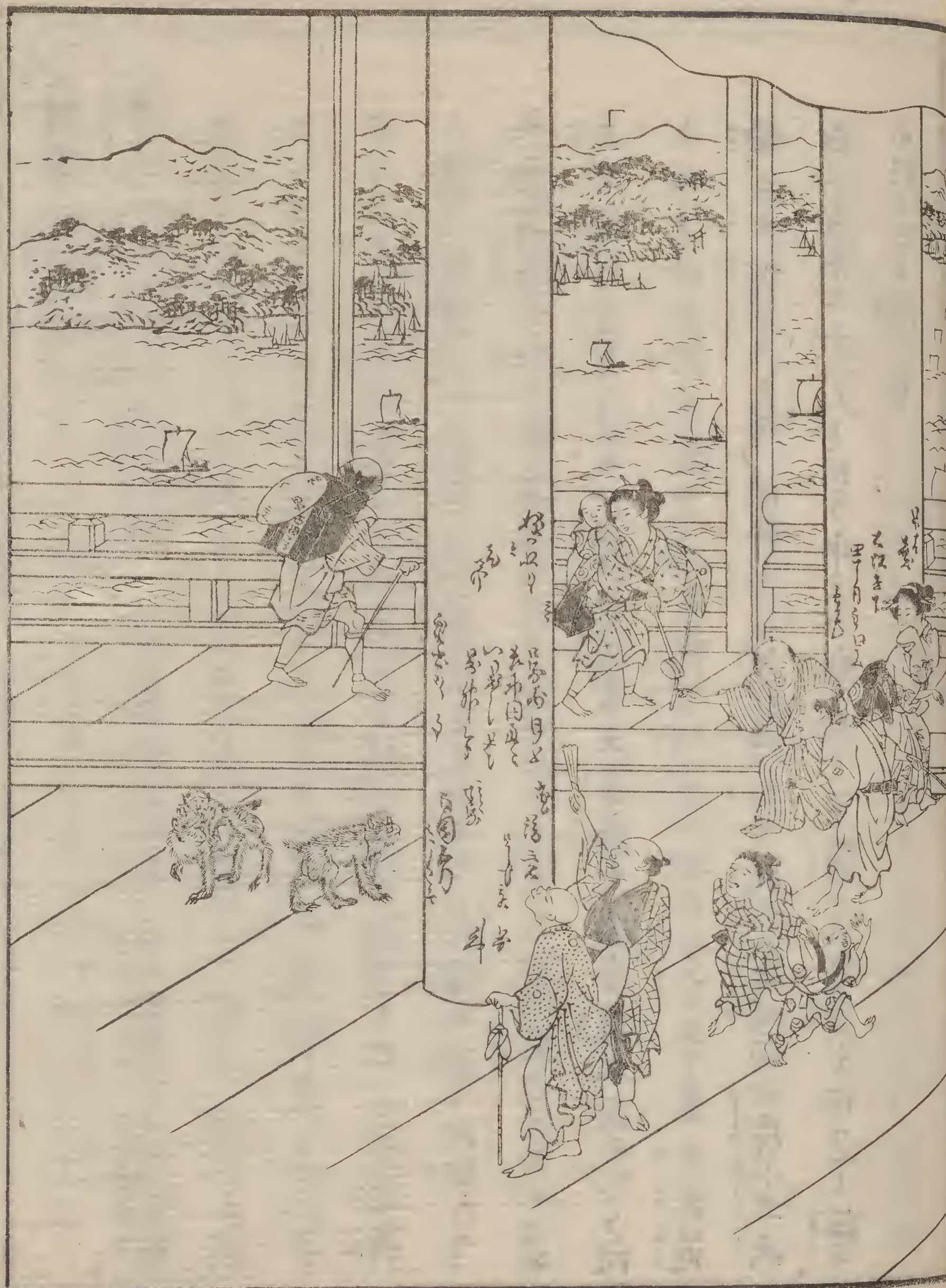
本社の東坂本にあり拝殿あり居あり　祭神三座　中央ハ江州志賀郡坂本山王を勧請次其余二座ハ平相國清盛佐伯の祖神を祭るといふ其證さだかならず

例祭二月酉日

此日上卿祝師六家両棚守出仕神舞あり

荒胡子社

山王社の北大経堂の埜下にあり瑞垣鳥居あり永正年中に鑄たる鰐口ありて社にかけたりしを今ハ金剛院に収さめあり

大經堂より眺望の圖
賴元鼎
鷗歸空渚在人去落花深獨觀雲出岫與我共無心

金剛院 大願寺の子院にして日社の本願なり

五層塔 大宮の右の方岡上に建たり方二間半 本尊釈迦如来 脇士普賢文殊両菩薩 九輪までの高さ凡十丈

應永十四年丁亥七月建立といへりけれど如何なる人の所建なるや詳ならず
天文二年癸巳に至て年暦爰に二百二十餘年殆頽壊まれよばんと
せしに人と是を歎きて再造せしかば壮観旧に復し今に五層高
く聳へ遠望すると紀らて宛然として鸞鳳の霞際に翔るに似たり
九輪再興の時の銘露盤にあり南のひらに天文二年癸巳三月十七日
上野前司菅原与菅前掃部頭菅原廣就大願寺道本西のひらに
大願寺沙弥衆豪祐尊海宗歓僧阿東の側に全宗五十貫井尻筑
前井戸弾正又左衛門治部北のひらに鋳物師大工壹岐同女房小工次
郎三郎平子十二人とあり中にハ磨滅して讀がたき処もありて詳ら
にしること能はず

大經堂 桁二十間梁十間五尺余椽幅八尺に方欄干をつけたり俗に千畳敷といふ五層塔の傍にあり 本尊釈迦如来 作詳ならず 脇士阿難迦葉 毘首羯摩が作

傳ていふ往古此地に樟の大樹ありけるが圍抱幾などいふ事教
しらず其高さ枝葉の繁茂せるまさ詞にたとふべくもあらざこの
故に天の日影を障へ翳して朝まハ大野の地方を掩ひ暮に至た
らく弥嶺を超えて能美なさびの島に影せり然るに関白殿下秀
吉公しらぬ大比筑紫へ御進発ありけると紀御船をこの島によせ
たまひ深く明神の冥助を御祈ありて御凱旋の折から此木を
伐らせその跡に經堂を創建したまへり是併御願圓満の御験と
ぞ聞えし偖その伐らせたまひし大木を以て作らしめたまひしは
かの名高き安宅丸の御船なりかく他材を交へずして全舟成
就に及ぶのみならずなをその餘材を経堂創建の料に足したまへる

大経堂の由来

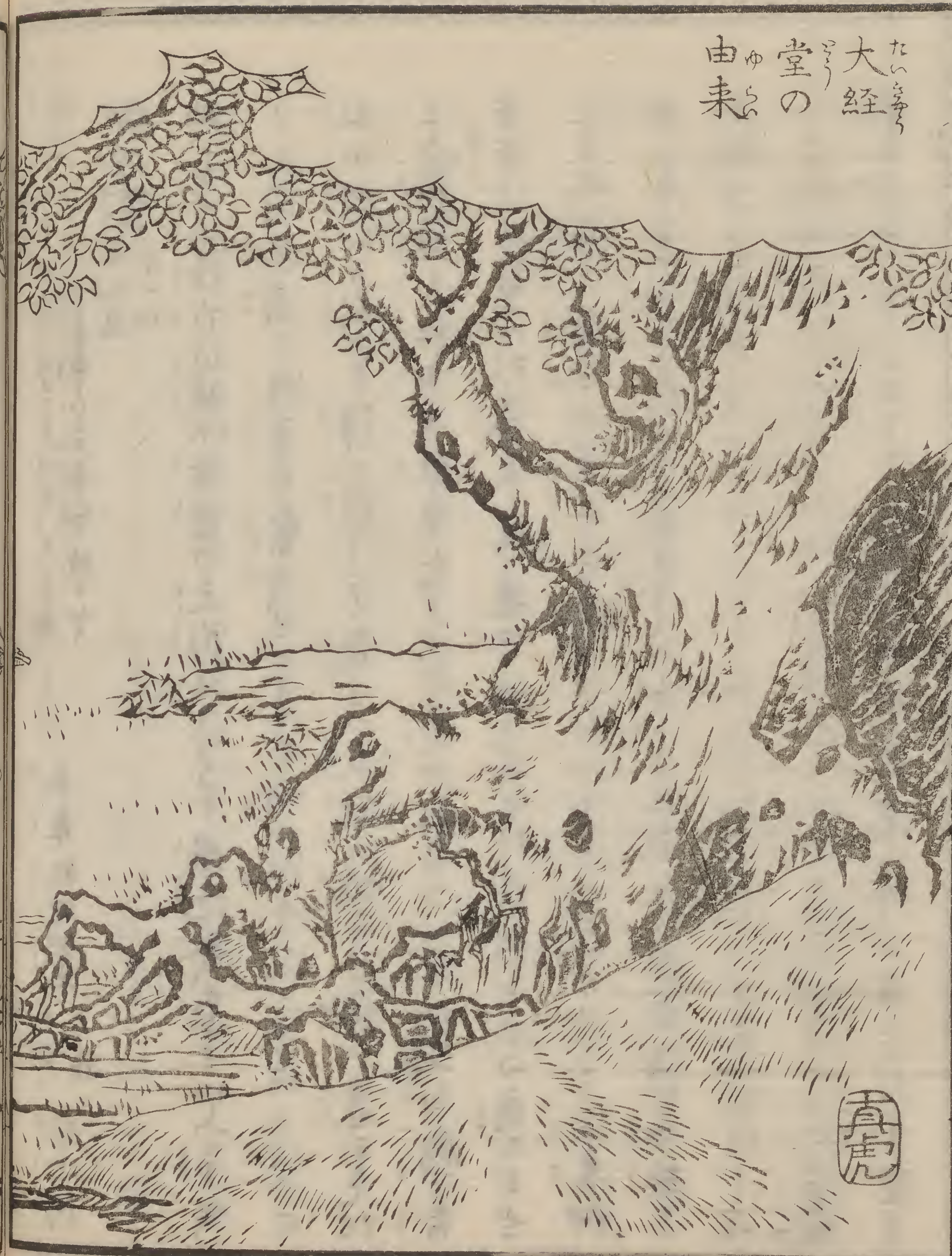
是をもて彼本の大なるもまた知べし　かくて経堂落成の日にいたりぬれば一切経の誦読ありて供養の式厳重なりしよしをいひ伝へたる（因にいふ　かの安宅丸は希有の大船なりしことは既に諸籍に著しいま広島の艋舸に楠木一株をもて大船一艘をつくれるよしをうたふ入てのゆゑなるべし）

○経堂建立の時安国寺恵瓊より大願寺へおくれる書翰

当島一建立候　関白様被仰出候　為御見廻候
宝塔并経堂御立候一月ニ一度千部経ヲ読誦
有之度被思召候　則壹万石急度被有御渡之由　御諚
候左様ニ候ハヽ申談ておの調島中へも此由にて被仰渡候　恐
々謹言

天正十五年三月十八日　　　　安国寺
　　大願寺　　　　　　　　　　　恵瓊
　　　御同宿中

伝へいふ大経堂の柱に塙団右衛門直之のうたありしが後年度々の経営に今は其柱かくれてなし
それ経堂建立のとき自ら題せしところなりとぞ

またこんと誰もえこそはいひおかめうしんにうちふ命ならねば　直之

題経堂柱　　　　石川丈山

一島周廻唯七里　層峯蒼鬱勢嶢然　衆人浴湶
長濱水群女徘徊　小浦邊塔傍山堂　高聳漢寺
棲林壑薄籠烟　飛樓湧殿連江曲　無數神燈照
客舩

納経堂（なふきやうだう）　大経堂の傍にあり　萬部諷経のとき用ゆるところなり

香櫻（かおひざくら）　同岸上にあり　弥生の頃は清香馥郁として尋常のものにあらず

龍宮恩蔵（りうぐうおんざう）　大経堂の麓にあり　二丈五尺四方の輪蔵にして一切経をおさめたり　中央に釈迦・傅大士・普成・普建の二童子を安置せり

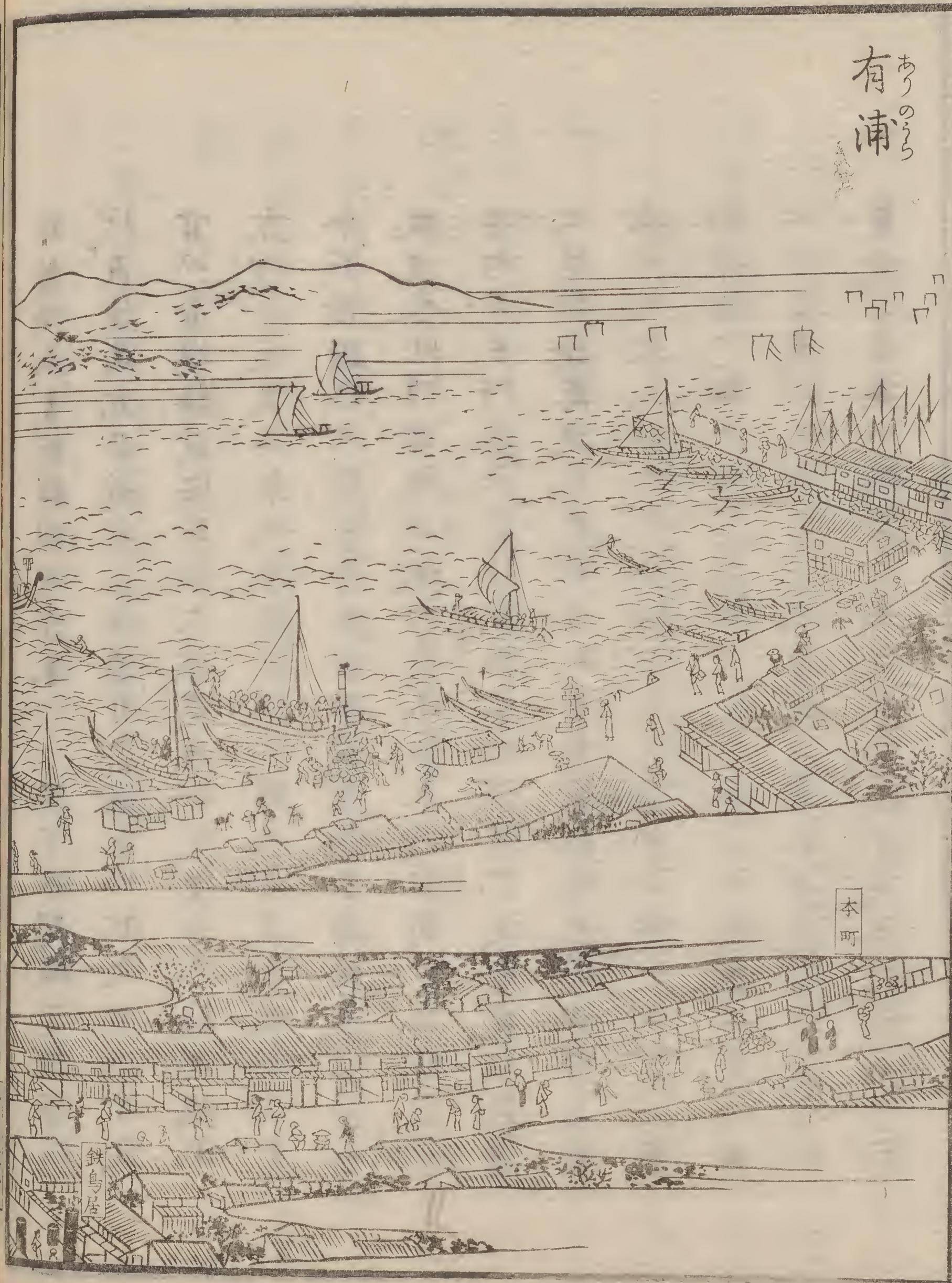
転法輪蔵（てんぽふりんざう）　龍宮蔵に同じ　額は根自休の筆

二所の輪蔵は天文五年大願寺道本上人往昔この島に納むるところの一切経なれども虫鼠に毀傷せられ残編全からざることを憾うみ

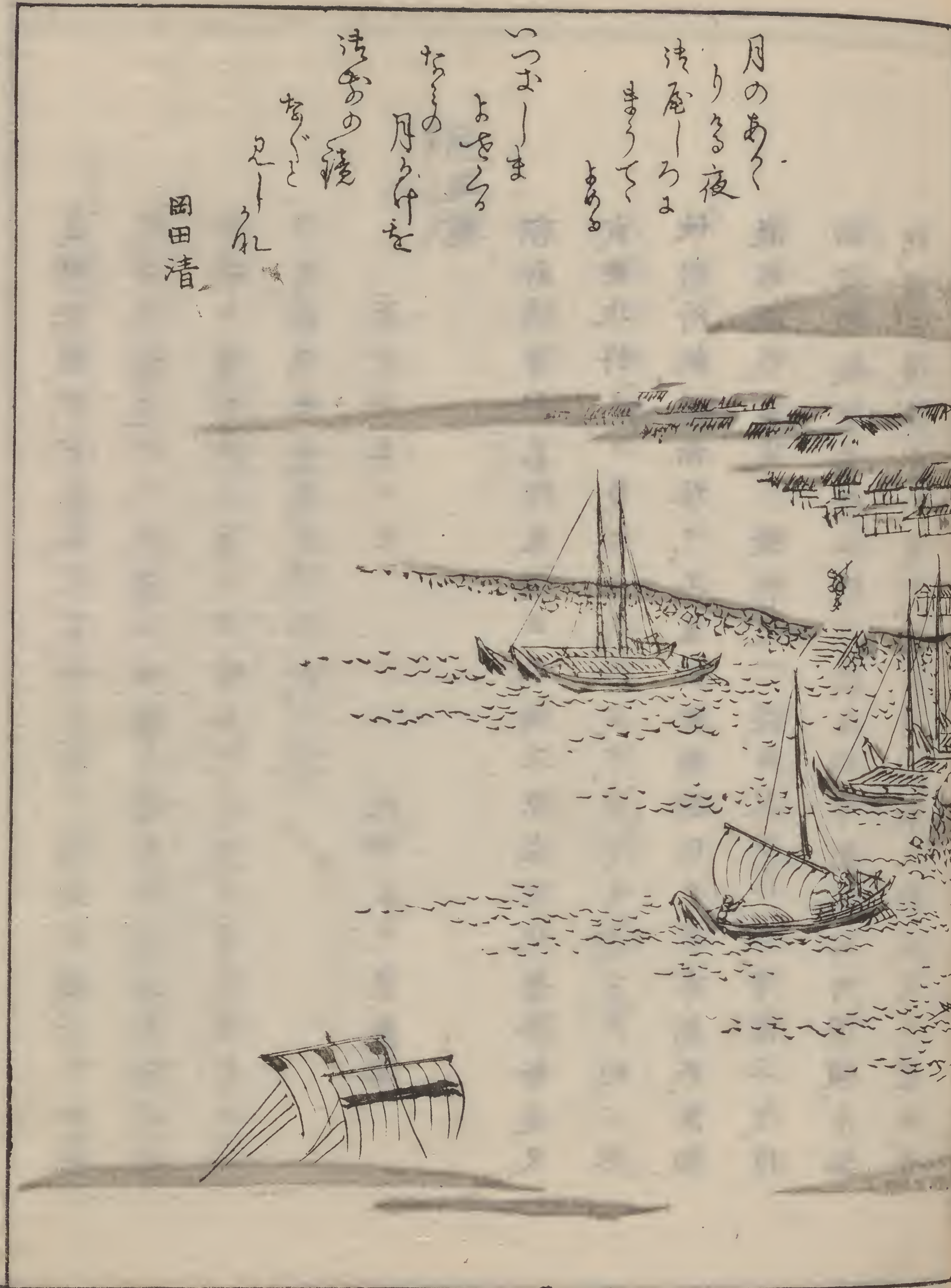
しみて憤然として是が異域に求むる志ありけるも其身終にいたることが果さず因て大内義隆に請ひ内僧尊海をして義隆の書が齎らしこれを朝鮮に求しむるに彼土も衰乱既に久しく佛經散失して其遺帙だにはたらなかりしかば徒に手を空しくして帰朝せり然るに天文十一年長門國普光王寺にもとより納めたりし彼義隆經藏とて毋に引て寄附せられき今乃轉法輪これなり 一に高麗藏といふ たゞ龍宮藏のみは何年また誰人の所建はや詳ならず里老の口傳には龍宮藏をふるしと言ぞかの虫鼠の毀傷せるといへるはこれ龍宮藏のことはやとそれも今はさまなる經巻一は宋板一は朝鮮板なり

○尊海渡海の時大内義隆疏勘合の寫

大日本國臣左京兆尹兼都督長史武衛次將多々良朝

臣義隆。奉書朝鮮國禮曹参　足下共聞殿下德兼三代。恵懐萬方。君道有仁。臣道有忠。國富化旺。文官以才武官以勇。境静民安。王政之盛。莫過於今。聖治之興。何愧于古。抑去天文三年之春。艤船以不腆之土宜矣彼船及于今不帰國也。只怪。着岸上陸而献方物。否。却没溺洋海之風波否。日。待囬報耳。越又吾本邦之内。有州曰安藝。有社安辨才多門兩天。為社主。而年代深遠也。夫大藏經。載道之器。而含萬理矣。運轉之則全覆燾。繞旋之則保國家安恭加之。古人以孔子比釋子。以十哲弟子比十大弟子。然則儒釋一致。不可外焉。吾　日域之神社佛宇。無大無小。以安置此經。為善道也。當社亦雖寄置之。或有蠹虫破費。或有雀鼠侵耗。有蒸潤者。有殘断壹函。亦不敢全。仍不

有浦
ありのうら
嚴島の隠寮
本町
塔の岡
鉄鳥居

月のあく
りある夜
浪風しろよ
まうてく
よある
いつよしま
よせくる
なみの月かげを
清水の鏡
なぐと見しられ

岡田清

克補完粘綴者年既久矣。仰冀殿下頒賜大藏金文壹藏付回使載帰、則以為億兆無疆之賜。專祝聖壽萬歳。更祈社稷千載。聊献菲薄之方物、具于別幅。天覽電矚萬幸。伏乞来納。温風發榮。君時珎重。不宣。

天文五年二月　大内多々良義隆

同返翰

朝鮮國曹判姜顯奉復日本國王臣左京兆兼都督長史武衛次將多々良朝臣義隆足下。兼辱書憑審多福。不勝欣慰。所献禮物啓了。土宜白細綿捌匹。白苧布捌匹。黒細麻布捌匹。席皮一張。豹皮一張。白人参二斤。清蜜三斤。付回使。惟領留。前索五經正義及両寺新額、即付回使。未知何縁中滞。想今已達矣。茲者復兼求大藏經。来使體雅。意求之殷懇。豈不欲勉副雅意。但前代高麗之時、所印經藏、復因衰季喪乱、幾盡已散。以及本朝。深山古刹容有遺貯。累將件帙、奉塞貴邦之請。近縁國家専尚周孔、不崇釋教。時好不存。遺失不收。年代浸遠。無留餘帙。轉啓良弁好之義。徒懐愧恨。惟希恕諒。餘冀雅摂。無恣。不宣。

嘉靖十八年九月　禮曹參判姜顯

牛王社　大經堂の艸にあり猿田彦太神を祭れり

奉行屋敷　同所にありむかしはこゝへの元占役所同所にあり政所屋敷と称せる是なり

鉄鳥居　同所にあり今往のみ残れり長寛年中の建立といひまた一説には足利氏の所建巧を経へるしてわきぬといへり何れか其證を得ず

服浦　國府上御田所氏いつも此岸小船をかくる例なる故に一ふ上ノ屋本といへり島巡の時もこゝより乗船を

有浦　平家物語にハ蟻浦と作り訓同じ児由名かよはし用ゐるなく惣名ハ東町にして數町にわかれさり所謂岡町幸町中間町中の町魚屋町北の町浅町西蓮町同奥町新町濱の町小浦にあり

一島の要津にして賈船つねに来往し櫓声唖軋として朝暮間

六月市立の圖

六月の十日より七月の七日までを夏市といふ夏市ハ春市烁市ニ對せる号なり春市ハ三月十日より正月八日ニ訖り烁市ハ九月十日より卅日ニ訖ること例を年中の三市といふ然れども春烁の二市ハ夏市の比ニあらずその繁花雑閙譬ふるニ物なけれハ夏市なりけり府城廣島ハ更なもいまだ近国の商賈肆をここに移して諸色をあきなふ殊ニ十七夜管絃講の前後ちと盛と次ぎで賣買の事のミにあらず或ハ哥舞妓或ハ弄丸或ハ楊弓或ハ樗蒲梟高假面の俳優ハ岩戸の故事をや習ふらん衣裳ぬぎさる籠脱ハ茅の輪の潜りや学ぶらん鳴呼祭礼にことをよせて各の利を営むもみな昇平の代の験なるらし

歌舞伎芝居の図
毎歳の三度の市には哥舞伎の名人あまた来り大宮の東の舞臺に於て勧進興行せし京都の顔みせ浪花の二三の替はもさらなり江戸ハ猶ひて西海第一の劇場なることと世によく志る所なりそもそもこの哥舞伎といふハ慶長のころおくに出雲の久にといふ女よりおこれりはじめハ僧衣を着鉦をうち佛号を唱へ念佛をどりといひしを後男の装束し刀を横へ髪を断り歌舞をしけれバ哥舞伎と名つけしとぞ当時の哥舞のさまを古画によりて見るになほ質朴のさまなりしが然るを惺窩先生ハ胡元の天魔舞に比して風俗の頽廃となげき玉へりされど今世の巧に巧を加へ熊に熊をそへ
群衆の男女の心を蕩らかしなば先生見なば何とのたまはん

金鳥居辻君の圖

いちはなや名ハたち
君のいまうらまひとり
ねあらはよはもいりな
禁と職人盡歌合ろし
よ乞りなるを抱もふは
浦この波のよる鮭ち
抱りも繋ぐぬ舟のう
招こるつとふて汐風
ま顔を晒し露霜
に袖を濡してあだ
なる出の兎まみをや
つをはくを乃抱をあハ
袂あり乃ま

梅華亭画圖

断なし昔は此の地海濱にして入江なりしが今は市街連綿とし
て巷の賑ひをも見え侍り

高倉帝厳島御幸記曰三月廿八日還幸の御船たてまつる内侍ども
汀にいでてなにとなく日頃の名残しのびかねたるけし
きなりなごりをしきよしをうたつかうまつれとありしかば

たちかへるなごり有の浦なれば神もめぐみをかけよとく波
風もしづかに物のねも稀も春ふかくなりまさるもひらけ
ぬれしまよりへにはうるをちりかさになりたる見申しく
神のしくれはえて三月盡まなりにけりき

足利将軍義植公西国下向のとき

ころたのむ神の恵みを有の浦ありし昔にかへしらぬ波　義植公

尋ね来て神にいのりはかはらぬきめぐみを思ふばかりぞ　聖護院　良恕法親王

有浦客船 八景の一

つなひよるたよりやありの浦浪にとまり定むる船そこぎそふ　参議公長

なぎがてに沖こぐ船のよう来るハ神にねがひや有のうら波　宜阿

ゆふいくらつなてもとかずこのまにならぬ見るや有の浦浪　似雲

瀲灔波光有浦前石磯一望水連天無朝無暮問津賠去〻來々幾客舩　民部卿藤原為經

群帆落日向千山繋纜翠巖碧石湾借問東西南北客夢魂應不至人間　僧獨麟

古岸候風賈客舩呉哥巴曲度鷗州不知遥夜蓬窓夢魂與月明到幾州　僧瞻雲

有浦風光何所有晩来唯見旅人舩定知吟得張公句猶聴鐘声平夜天　僧仁峯

其二

尼洲 一に二位の洲ともいふ有の浦乃沖の洲をいふ

傳いふ壽永のむかし長門壇浦にて二位尼安徳天皇を抱きたてまつり海底に投せしに其の尸此洲にたゞよひよりしその穢を悪みて其所の土を堀て捨しとぞ今尼公の像神泉寺にあり

圓城院 南町にあり社僧なり奥坊神納寺と称す開基いまだ詳ならず次天和年中に仁和寺の末流に屬せり中ごろ當寺の住侶歌をこのまれハそのゆかりを以て玄旨法印投宿せられきその〻次にあげゝるによりて知べし

本尊千手観音

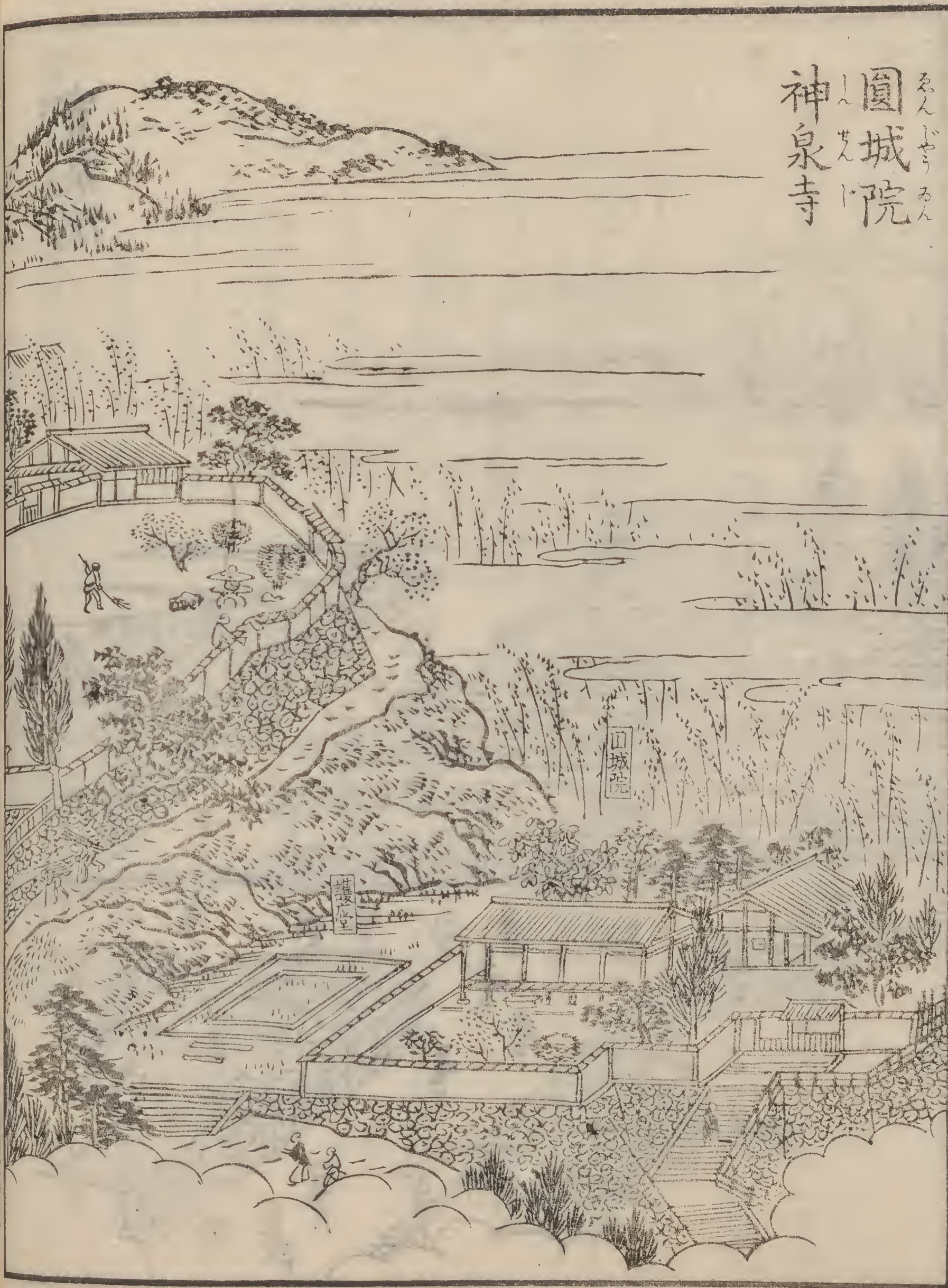
九州道の記にいちくやとりける処ハ円城院の坊といひけることよひの塊まつり手向などかまへられたるにまさなくぎ次のふく声三こゑなけるをこゝにきゝいつもか露らにあるらとたつ祢しにめづらしきことなりといふ一首をよみてつかハしける

志での山こえてやきつる時鳥たまつるよ孔空になく那り

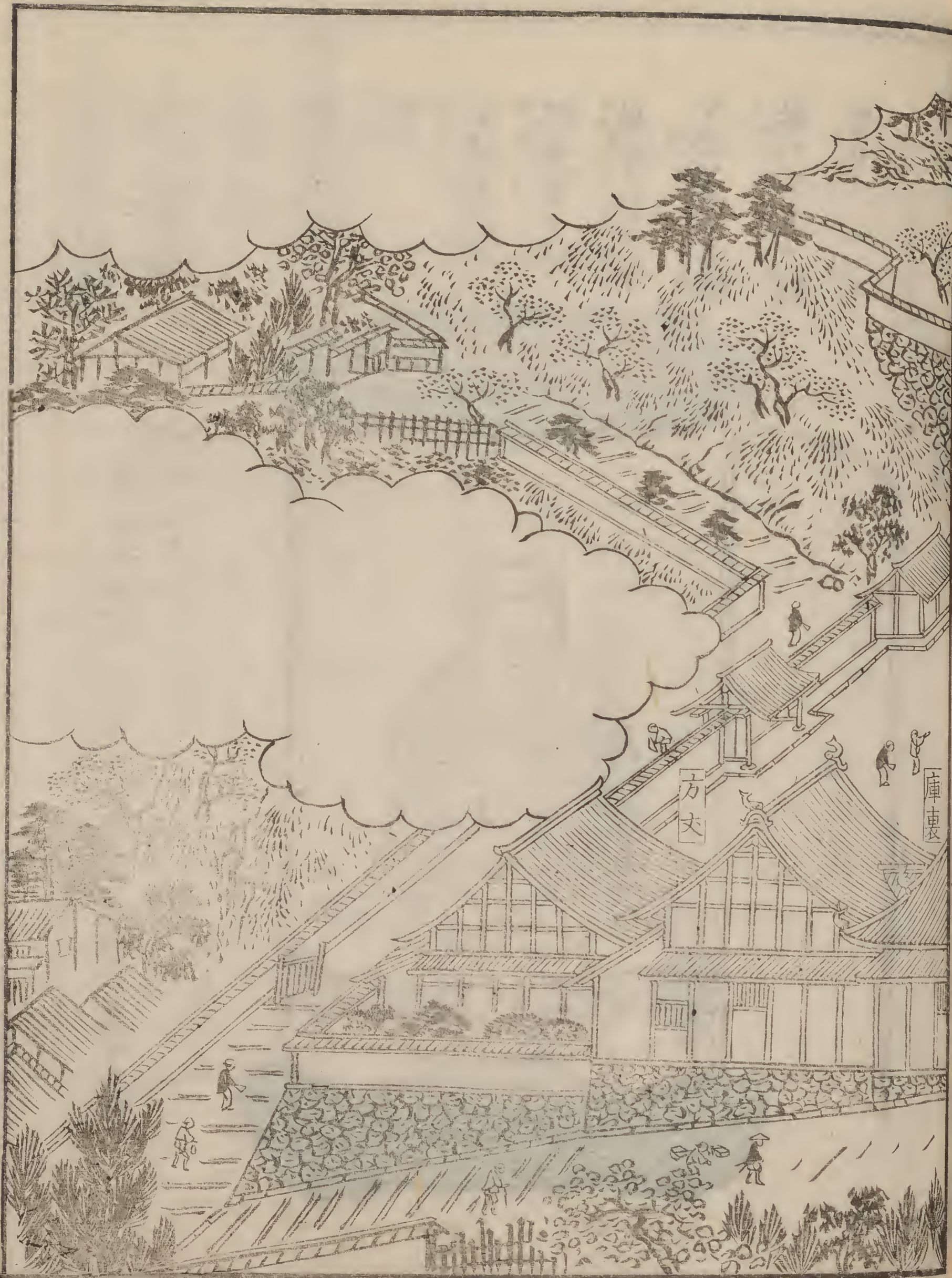
玄旨法印

道成山無量壽院神泉寺 浄土宗なり晝夜更漏を報むるを以て俗に時寺といふ南町にあり

寶泉院

圓城院(ゑんじやうゐん)
神泉寺(しんせんじ)

神泉雖舊景殊新
日日眞遊不厭頻
試倚層軒窮活眼
三千世界一徹塵

寺田臨川

光明院
くわうミやうゐん
万霊塔
本堂
庫裏
方丈

二位法尼肖像

尼公ハ平相國清盛の室 建禮門院の母公 安徳帝の外祖母なり 神泉寺ニ其像を安置する縁故ハ本文ニ詳なり

本尊阿弥陀 座像御長三尺 定朝の作 服仕不動 御長三尺弘法大師の作 毘沙門 御長不動ニおなじ 智證大師の作

中将姫像 二位法尼像 ともに堂内ニ安置せり

護摩堂

當寺開基ハ祐光上人なり 但し開基の年月ハ詳ニせず 決房顕記ニいはく 壽永のとし平家西海ニ淪没せし時 二位禅尼の尸有浦ニ漂ひ来り努この故ニ阿弥陀堂を建一道場を開けりとあり 當寺一ニ阿弥陀寺とよぶ 二位法尼の像を安されバ則壽永の建立なること明らかなり 抑此元ハ宗旨天台なりしが天文のころ堪阿上人中興して今の宗ニ改めたりといふ

華降山以八寺光明院 神泉寺ニ隣れり浄土宗 京都智恩院末寺

本尊阿弥陀 立像御長三尺 恵心僧都の作 開山以八上人像

經藏 庭内ニあり一切経を納む

末寺四宇 以中庵称名庵紫西庵およひ島の御堂 備方村ニ西念寺あり

當寺の開基を尋ぬるに天文の頃以八岱中とて毘弟ともに不凡の

玄旨法印郭公を聞たまふ圖

九十

蚊のをらぬ島まちやもしかとしき沙

聖なりし妃角の袋中は檀王法輪寺を再興して京都三条に住たまへり
（袋中の行徳都名四畳會に著）以八上人を繁華の地を厭ひ当島に来り此寺を建つと
いふ新著聞集に云く薩州宮島に光明院の開山以八和尚奥州磐城
の人なり其の母子に無きを憂て弁財天女に祈請して桶に石
を入て頭に載き足を翹て月影をうつし宿したに奇瑞を得
て誕生したまふ後に出家したまひて徳行いまそかりけり加茂式部
大輔どのは不信の人なりけれバ此そその僧を試さんとて招請あ
りて斎を設け家老二人相伴ましてそれに饗応にことしく魚鳥
を料理し艶色ある女子五六人に草の羅を着せて給仕に出しもの
の隙よりうかがひ見たまふに和尚自若として暫く眼を閉たまひ
されど料理せる魚鳥は忽に飛躍り給仕せる女子はミな骸骨
となりぬ大輔胃のあたりの変相に大にをそろき即坐に

改悔発心したまへバみなもとに如くになりし和尚教化ねんごろ
にしたまひてそれより安芸の国へわたりたまひこの島に住居をしめ
らる常に美麗なる女十余人随仕しけれバ誹謗をなしける者
聞たまひてその女ともを法談の席へ呼出し汝等ゆゑに他に其
しりをなさしむること不便なしみなり急ぎこの所を立退くべ
しと仰ありしかバ海上にはかに波浪おこりて暴風すさまじかり
けれバ聴聞の人々ことはいふにおよばず肝をひやす所にさしも嬌艶な
りし容忽に蛇形となりて黒雲ともに海底に沈入にける誠
に天女の十五童子をつかはして給仕せしめたまふこの時まで
はじめて知りしとかやその後一千日の別時念仏を修したまふ八
百日もあまるころ島の社人たまかれ数人に一様の夢みけるとし
かりて残るところの二百日は社内にてつとむべきよし示現ありけれ

以八上人説法之圖

に至度までにおよびしかば此の上はとて彼の別時念仏を社内にうつしてつとめらるること百五十日などへて和尚霊夢の告ありてこれこの四向の日にあたり往生決定のことまひしかばそのよし遠近に聞え道俗いく千万となく打つまり起ちて日中になりしかば群集の者に高らかに十念授けて往生をとげたまひけり紫雲西方より靉靆天華降り妙香匂ひ微妙なる声など無数なりしかば老少往来の諸共しばへぞ仏骨を拾ひとりて結縁せんと待かけけるに俄に潮みなぎり来りて一点の余灰もなくうち海中に流れ入りしとなん実に龍神の供養せし事とおぼえてぞ尊としたてまつることそのゝちに或人上人の肖像を画いて讃をもとめられしかば

きえねたゞおもかげもうきこの世には残さじとおもふ水の泡の跡

かくよみてしめしたまひぬ上人の遷化は実に慶長十九年九月十四日のことなり今も正月十九日には上人の月忌始とて詣る人おほし

什宝

光明院の額 青蓮院の宮尊澄法親王御筆　六字名号 円光大師の筆　同名号 恵心僧都の筆
引證弥陀経 円光大師筆　称声弥陀経 中将姫筆　地蔵尊画像 弘法大師筆
円光大師画像 自筆　弥陀画像五幅 弘法大師筆　般若心経 覚鑁上人筆
一遍上人画像 上人自筆○此余数多あれども省きぬ

谷原

紅葉谷の右手をのぼりて平曠の原あり常に麋鹿群をなせり木の梢のもみぢ映るころはまさに一しほの色を添へて秋色実に愛翫べきところなり

谷原麋鹿　八景の一

なく鹿のこゑは秋なるやつ原をときはの松はときもなかるに　風早実積

谷原（やつがはら）

谷原麋鹿（やつがはらのびろく）

殿邑
安守

波あらふいそやま松の草枕なれてそつまとふ鹿の音こそきこゆれ

寺田
臨川

雨餘豊草満原
春水緑沙明境
自眞麋鹿知無羅網患
呦々不敢避遊人

晴川法印筆

夕されハ席の音さむしやつらなにちいろづく秋のあらしに　宣阿

傳道原頭物色幽。清風爽氣不因秋。數株松樹陰森處。且暮只看麋鹿遊。　菅原為範

豊草茂林地自幽。引群仙鹿足優遊。慣看來客能相狎。不識狐裘弦矢憂。　僧獨麟

谷薬師堂　同所にあり

中間谷　中間町にあり

鳥居松岡　同所の上にあり松二本ならひ立て鳥居のごとしよつて名づく

こ社辺より大仏亦へこゆる山路すべて櫻木の林なるゆゑに弥生の頃ハ花さかりにおひて韻人騒客帰ることを忘れしむる處なり

人麿社　中高谷にあり

中間薬師堂　同所のわきにあり

道祖神社　幸町にあり一に牛王ともいふ　祭神猿田彦大神　陰陽石　同社の後にあり俗に道祖神此神体なりといふ

北薬師堂　薬師町にあり正月十二日此堂において薬師講を行ふ

寶光院　薬師町にあり社僧寺なり天和年中仁和寺の末流に属せり開基詳ならず

本尊十一面観音　佛長二尺一寸弘法大師の作　脇士不動毘沙門　各佛長一尺二寸

龍上山西方寺寶壽院　同所のわきにあり真言宗京都仁和寺の流

本尊阿弥陀　座像佛長一尺五寸　脇士観音勢至　各立像佛長一尺二寸

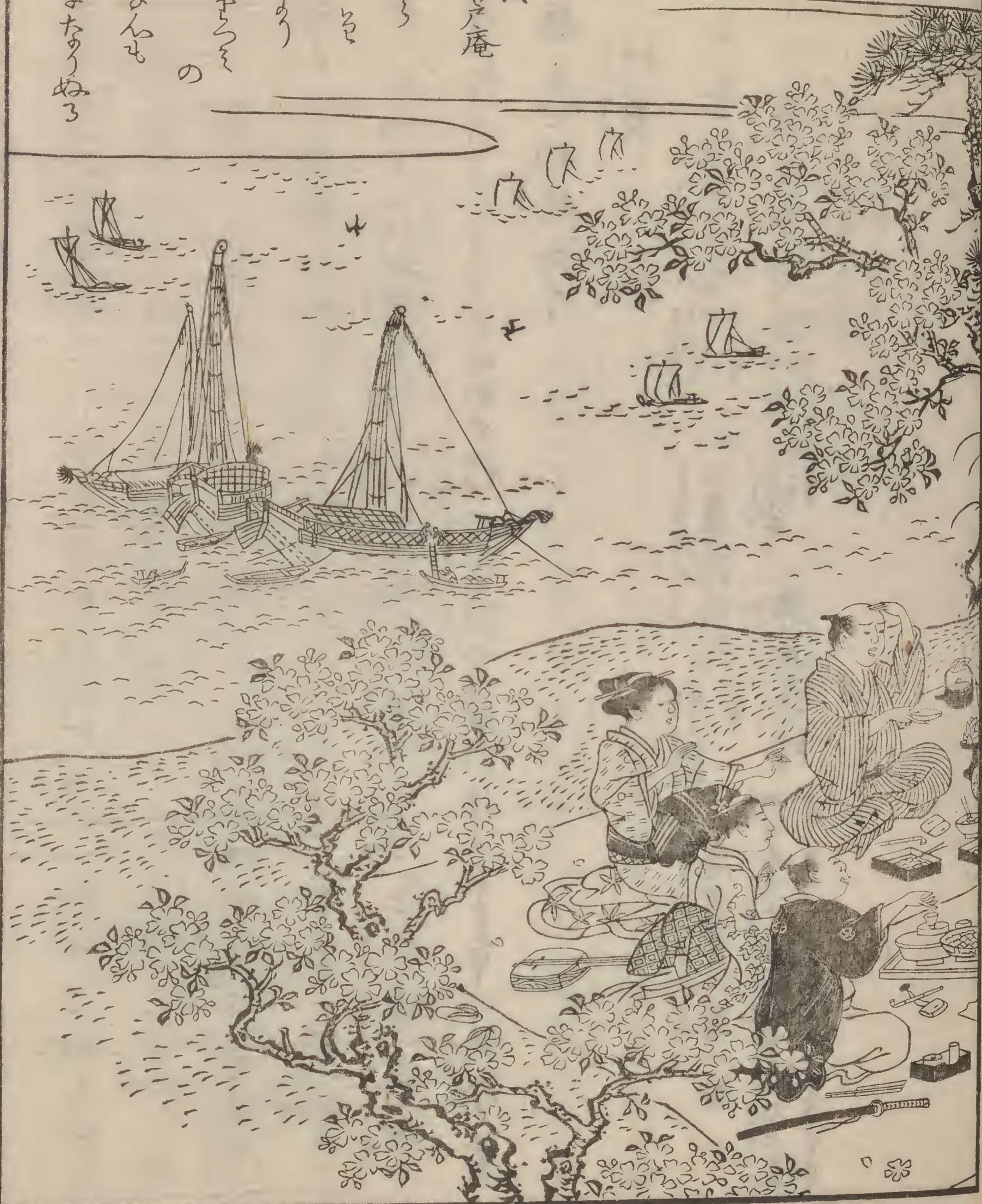
観喜天堂　境内にあり　鎮守金毘羅社

當寺の開基詳ならずといへども文安年中宥順上人の中興なり

そもそも當寺に安置し奉る本尊の由縁を尋ぬるに往古この浦に蛍火にあらずしてよなよな光を放つものあり来往の人々うつゝながら奇怪しみ漁父に命じてこれを網せしむるに豈はかりきや大聖弥陀の尊像にてぞありしほどなる島人いはふも此

中間谷

小沢
芦庵

山さくら
はきゝを
ゑしより
こまちつゝ
の
枕きなんも
花となりぬる

らなり遠近の老少つてへ聞く尊信渇仰の輩いとおほし時に諸國
斗藪の比丘ありけるがこの霊應に感じて身を抛て諸人を勧
進し遂に一宇の建立を尋て文安のころ高野の学侶宥順上人
辱くも天奏を經て堂宇を再建しまはしく本尊は龍刹より
たてまつるといふ由を以て山を龍上と号し寺を宝壽とぞ称し
ゐるかくりしよりこのかた信心崇敬の輩たゆることなく於今霊
應ますます炳然たり

付寶

不動尊一幅 弘法大師の筆

三尊阿弥陀 恵心僧都の筆

観音画像一幅 輪王寺の宮光子内親王御筆
此ハ大閤征韓の時伝来し故ありて当寺に寄附しまつるとぞ

唐画薬師

唐畫五大尊一幅 明の嘉靖中聖烈仁明帝画工に命じてゑかゝしめたまへる物なるとぞ

福壽院 大悲山と号す宝壽院の抱地なり

靡愛染院 宝壽院の境内にありて新日山頂峯寺といふ久しく廃して今その本尊愛染明王は宝壽院にうつせり
本尊不動 二寸

神力寺 西蓮町の上にあり 御丈長二尺

大仏堂 同所にあり俗に大佛といふこの仏堂は本社の艮にあり鬼門の鎮護といへり毎年正月十五日供僧の僧正参向あり
本尊阿弥陀 御丈長一丈六尺
脇士不動毘沙門
これを大仏の森と称して地漸く廣く花木多し弥生のころは
酬哥の遊客花顔雪肌の者を率ゐ来たりて春色をもて
あそぶ多かり

慶龍翔寺跡 西蓮町の上の山にあり京師紫野大燈國師の建立にして輪奐たる堂舎なりしがいつの頃よりか退轉していまは礎石のみそのなごりを残せり

新町 東町の内にして娼妓の郭なりもとは広島の市中にありしを寛永のころ此処に移さるといふ

摺鉢谷 新町の後にあり大木の桜多し毎年正月元日のはじめ御神前へ新衣を奉るに新製衣の諸蓋よのせて奉れりこの諸蓋とゆふもの桜木もて制衣ありしこと古式なり故に島内の桜木漸く大なるものハ間くこれを伐るをありしにこのところハ青樓のうしろにて情死の者あるをもてこの撤れをいみて谷をいはれて木ことごとく老大なり

存光寺 存光寺町にあり禅宗佐伯郡廿日市洞雲寺流なり

称名庵
北薬師

寶光院

本堂
護摩堂

宝珠院
福寿院
金比羅
秋バゴンゲン
本堂
本堂
庫裏
護广堂
聖天堂

大佛原（おほぼとけのはら）

うねこや

大御堂

本尊阿弥陀 立像伝長三尺　脇士観音勢至 立像各長二尺五寸

當寺ハ和州多武の峯浄土院存光和尚の開基にして中興ハ云
的和尚なり

濱役所 濱の町中に浦方にあり属吏

町會所 同所に

杪場 濱の役所に隣

宮尾城墟 有の浦北の尾をいふ一に要害の鼻ともいふ毛利氏陶全姜と合戦の時城をこの所に築かれしより要害の名ハありとぞ

陰徳太平記曰毛利元就ハ隆元元春隆景父子四人ひそかに相議せ
られけるハ陶入道はさ免てちかぢうちに義長の後見として當
國へ攻入べし渠防長豊筑の勢を引率せバ定て大軍にて押
るべきかくてハ平場の合戦其利を得んこと覚束なし吾熟
思案をめぐらすにまいつくしまに城を築き敵を呼引たのむ

陶我謀に陥て彼島へわたり城を攻落しそれより仁保の島乃
城を攻とらば草津櫻尾の城ハ攻ざるにおつべしと工夫して河
魚の香餌に附くが如くうかうかと渡海すべし入道なる行を
好むと己ら勇に誇り軍術の危きを忘れ急に勝利を得
んと欲る癖より起れり渠勇なりといへとも慮浅くして人我
侮れり是欺くに易き所なれバ死地に陥れて一時がほどに
勝負を決すべきなり彼しまに城を築くこと敵を方便の
第一たるべしと評定一決して天文二十四年五月下旬にわたし
渡りて鍬初し頗〻甍〻の經營夜を以て日に継かけて讐
敵追討のためなとて明神へ金銀珠玉の奉幣を捧かり
山の如くに積上ける其外大聖院の良政僧都上卿祝棚守大
願寺宮僧社人に至るまで禄をあたへけれバみな〳〵大によろこ

新町

今の世に遊女はむかしの夜発なりむかしの遊女は今の芸子なりそは倭名鈔乞盗類に遊女揚氏漢語鈔云遊行女児和名宇加礼女又云阿曽比一云晝遊行謂之遊女待夜而発其淫奔者謂之夜発今按夜発俗云夜保知とあるにて知べしさて中古よりはその遊女の中に白拍子といふ一種いできて男舞をまふ今の舞子に似たるものにて下学集に白拍子歌舞而衒売女色之者也とあるこれなりされば遊女と白拍子とは共に芸を以てうかれありくものなる故に後鳥羽の帝は水無瀬殿にめしおほしことしばしばにて度といふ数をしらずその外の御代にも御遊の折々は参りたることもありて当時の記録どもにみえてなりかくまでもかしこき宸儀のみあたりまさへかく近づけよせらるるものなれば公卿殿上人はいづれもこれを免でぬはさるもの中には城を傾け国をかたぶくる艶色なき

ましも あゝ称ハ思ひかけぬ寵を蒙りて幸ひを取出したぐひも於ゝかりき夜発ハ於女ふやうかそりてたゞ淫奔を発せるむかりなる故またとひ花を猜ミ月を妬む美姿ありても いとつきま地下の塵まのミうづもれて漢雲の交りをゆるされぞこれまよりて記録どもの中まも残さく載たることもあらだ志らハあれどかきもこれももと同類ふて倭名鈔ふを盗のたぐひなしたまへバ賤者なることいゑんも更なりかくて今の於女まて

之子ハもとより貴人の前ふ出ることを能ハぜたく市井の少年のもてあそびもめなれバいとゞ昔よりも於とりたらんと一己たりハ思ハるべきことながら既ま昇平二百年奢侈きハまれる世の中なれバ扇屋の白菊唐琴丁子屋小田屋のさくらべに唇ふかざりて紫衣紅裳の流行しきいろなる江口の全盛も所を譲らん容貌一度いろふ染る者たれしこゝを傷ハきらんあやまりても此廓ま久しく足をとゞむることとなられ

この良将の武運天にかなひ長久まして讐敵大内家の者どもた
ちまち討亡したまへと社人は神前に於て神楽孔鼓鈴の声
に祝の詞を盡し供僧は弥山に登りて護摩の烟に丹心のま
ことを顕はして求聞持をぞおこなひける實や誠は天の道神明
感應の理にや有けんほどなしき六月ちかゝぞも敵の船大野口
へ来り厳島に在合せたる警固船浦兵部丞飯田七郎左
衛門等を先として思ひよらざるをりなれど敵船こぞりて来
たりたま船漕ぎ出せ碇引上げよと喋めきけり尋常の兵どもな
りせば唯今の有様にては假令取合せ馳向ふとも忽利を失ふ
べかりし然何も水戦に馴たる勇士なれど漁父いまだ鈎を
擲さまど毎金鱗波をよせ来ると喜びいさんて漕向ひ散々
に攻戦ふところに敵も後ろに三艘にて来れるなとの死生不知

の勇卒なれは身命を惜まず防戦をはまと毎御方これをなす
ともせず飯田七郎左衛門敵の宗徒の兵桑原掃部助を討とり
けれど敵大に機を失ひ何処ともなく逃行けり元就去年
折敷畠にて既に合戦にれよばんと爲る期に至りて石田六郎
左衛門當島より御久米巻数捧け来りしに依て合戦利を
得たり今まさ當島に城を築てちかゝさるに敵来り桑原以
下を討得たること是疑ふところもなく當島の明神敵に打
勝吉瑞を示したまへるなりとよろこび即ち頸ども城のふも
とにかけならべけりかくて城の地尾續の方をば人丈ばかり人のちか
らを合せて深く掘り切り城郭要害の利軍法の秘術をつく
したまへるなれど餘所目には浅まなる小城にて地の利まさて堅
固なり次行手に掛て擲ると毎たやすかるべき様にも見えまども

今伊勢社（いまいせのやしろ）

存光寺（ぞんくわうじ）

載酒凡皮趁晩潮。小紅十五坐吹簫。存光寺畔佳風月。總説曾遊䰟已消。

管耻庵

遊存光寺

僧存榮

靈場知幾寺傑出一禪林賴有法中主擢縦物外心山呈清淨相海奏度生音千戸肆鄽裏括囊神所歆

敵ちかく攻寄る時ハ壁立萬仭に碧海ふもとを繞りされど容易にお
つべき様ぞなかりける普請功積りて成就せしかば己斐豊後守
同五郎兵衛新里掃部允を大将として垣田伊豆斤岡に吉川元
春の手の者佐伯源左衛門樋口彦兵衛福原左近将監が郎等福
系刑部大輔等を先として究竟の兵三百余人さし籠らる塁
たかく溝深きうゑらはまた勇将猛卒なれば防ぐ勢何百万
にて攻るとも輙く落べしとハ見えざりけり

今伊勢神社 要害の麓にあり拝殿鳥居瑞垣あり例祭十一月初日

毛利家より米二十五石を附られて毎年湯立の神事を行なふこれ
陶全姜の霊をしづめられんがためなりとぞ

休堂 長浜に浦へこゆる山路にあり貧賤の旅人の一宿のために設けたり

二王門 同所にあり往昔本宮の二王門なりといへど其證なし延宝六年ふたゝび創立すこの辺も桜樹多し

毎歳十一月朔日今伊勢
御湯立の神事ハ
存光寺ち内に
於てあれ故
行ふなり

宮尾城合戦

宮尾の城ハ今の存光寺今伊勢のあたりこなその郭内ハ即今の地勢を以考ふる時ハいかにも浅間なる砦塁なるべしともおもハるれども諸軍記によるに経営時月を費し趣にも見え且陶氏大軍を以て攻寄せしことなど彼此と思へハ巍然たる一城郭なるべし看官今時の形勢を以画面を議することなかれ

文陽

小浦(こうら)
二王門
幸神

小浦 むかしは漁家なり寛政のころかとよ此浦にしよろといへる孝女ありけるが五歳の時より父母
に仕へ朝暮の勤誠をつくせり此事官に聞えければ銀若干を賜ひて賞せられきそのとし
よろ五十七余なりけるとぞ其外魚屋町のや次中西町
助六が妻も孝を以て賞せらる皆同し比なりとぞ聞えし

池浦 小浦につゞきたり此辺花木多し
舟中より望ていとよし

蛭子社 小浦にあり

角佛堂 小浦の浦にあり役小角を安置せり

揺岩 長濱のうち仁王門の辺にあり
大さ方二尺ばかり

西行返 仁王門より長濱へかよふ路角仏の前より池の浦の山路をいふなり西行法師此島に来て
嫗にあひて山路を尋ねしにゆくへもせまりしかばふりつもるせみのもぬけのからにとはゞ山路をさ
へもしへざりけりとこたへて嫗うちゑみしも蝉けのからとよむなれ既にもぬけのからなれ
はなかなかなりとて返さんといへり西行答ふるに言葉なくしてかへりぬるより此所をかくなづけ
しとぞ○案に香川氏の秋長夜話に云此事西行撰集抄にもみえ次に朝語園によるに西行奥
羽松島に遊しき七月初めより名所二百ばかりもめぐり興つきてこれよりおちにしかりぬべき名所いかなど
問ふと里人に問ふにいま十月ばかりにして見尽さるべしといふ西行退屈して是より立帰り其処を西行
戻といふといへり此事を附会せるにやといへども今もところ久しく島まはりなきいかくしるし

嚴島圖會巻之二 終